

被服の縫製指導に関する研究（2）

——なみ縫い指導にかかわる基礎調査——

三田利子

Toshiko Mita

I はじめに

⁽¹⁾前稿において、昭和59年度入学の本学家政科家政専攻者の和服製作指導上の問題について実態を調査し、その結果を報告した。本稿は引き続き昭和60年度入学の家政専攻者を対象として、前年度同様の調査を行ない、本年度とその傾向を比較し、和服製作指導上の問題を探ろうとするものである。

II 調査内容と調査方法

1. 調査対象

本学家政科家政専攻第1学年学生57人

2. 調査内容

- (1) 家政科家政専攻者の志望状況
- (2) 被服の既習教材とその利用状況
- (3) 手縫いとミシン縫いに対する学生の好み
- (4) 「なみ縫い」技能の習得状況と理解度
- (5) 「なみ縫い」技能の学生評価と教師評価

3. 調査方法

前稿同様(1)～(5)のうち、(5)「なみ縫い」技能の学生評価まではアンケート調査法による。同じく(5)「なみ縫い」技能の教師評価は以下の方法による。

被験者56人に試料布（諸元は表1のとおり）を与え、図1のA線を縫い合わせる。針は既習のもの

表1 試料諸元

諸元 試料布	組 織	厚さ(mm)	密 度 (本/cm)	
			た て	よ こ
晒しもめん	平 織	0.43	21/cm	21/cm

諸元 試料糸	織 維	番手(S)
手縫い糸	綿100%	30/2

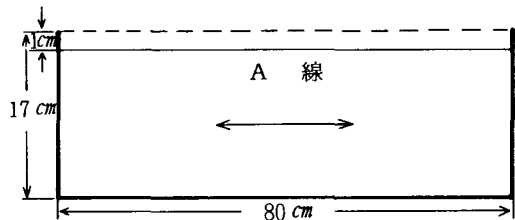


図1. 試料布の縫合線

を用い、指ぬきの使用は自由とする。針を布に刺し、縫い始めてから2分間をビデオカメラ（ソニーCCD-G5型）で撮影する。撮影場所は被服教室南窓下の所定の位置とし、撮影は被服構成実習（和裁）1の授業中に実施した。

4. 調査期間

昭和60年4月～6月

5. 回収率、回答状況

回収率98.2%，回答者56人，有効回答率100%

Ⅲ 調査結果と考察

1. 家政科家政専攻者の志望状況

(1) 出身高校の県別・学科別割合

入学者をまず出身県別にみると59年度は岡山県49人，広島県42人，その他の県3人で合計94人であった。60年度は岡山県35人，広島県21人，その他の県はなく，合計56人で全体的に学生数が減少している。特に広島県は減少が著しい。そこで入学者数に対する岡山県，広島県別学生数比をみると，岡山県は前年度52%，本年度62%で10%増加しているが，広島県は前年度47%から本年度38%と9%の減少がみられた。

この状況下において学科別・県別学生数を比較すると図2のとおりである。両県とも普通科出身者が60%以上を占めているが，その他の学科については岡山県は商業科・家政科・被服科出身者がいずれも10~20%の範囲内にある。広島県は商業科出身者が5%，家政科出身者が19%で，商業科出身者よりかなり多く家政科出身者が入学しており，被服科・その他の学科出身者は皆無である。前年度の状況と比較した場合，著しい相違は図2でわかるように，広島県の商業科出身者と家政科出身者とが逆転していることである。

次に県別入学状況を図3によりみると，普通科出身者は両県ともに約50%前後で著しい差はなく，家政科出身者は奇しくも両県が50%という同率であった。ところが，商業科出身者は両県間では86%と14%という著しい差が生じている。前年度との比較は，図3にみ

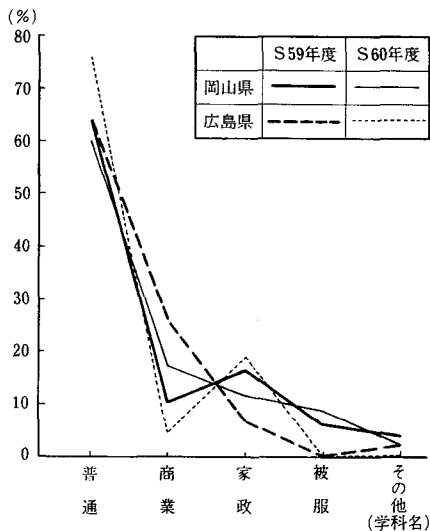


図2. 出身高校の学科別・県別学生比率

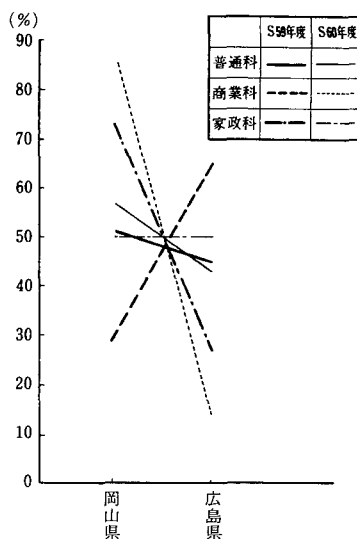


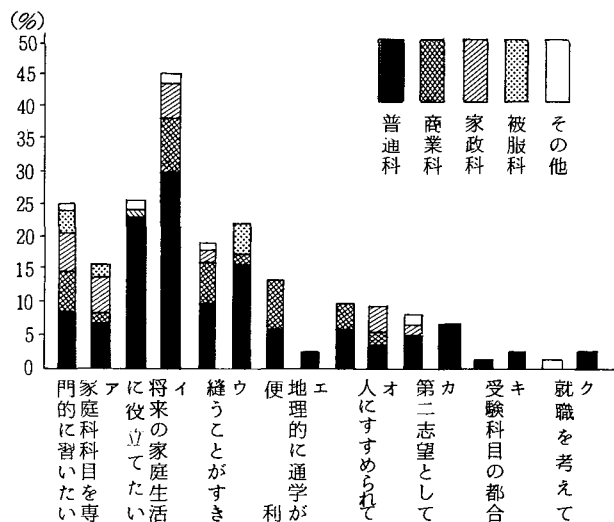
図3. 出身高校の県別・学科別学生比率

られるように、普通科出身者は類似の傾向にあるが、商業科出身者は著しく逆転しており、家政科出身者は昨年度の両県の間にあった著しい差がなくなり、50%ずつの同率となったが、少数でも岡山県出身者が少なければ逆転傾向を示すことも予測される。したがって3学科の両県間に占める割合は、普通科出身者は兩年度類似の傾向にあるが、他学科には変動が多いものと思われる。

(2) 家政科家政専攻志望の動機

志望動機についての回答を前年度同様にとまとめると図4のとおりである。

- 7. 家庭科科目を専門的に習いたい ……15.8%
 - イ. 将来の家庭生活に役立てたい ……45.6%
 - ウ. 縫うことが好き ……21.0%
 - エ. 地理的に通学便利 ……1.8%
 - オ. 人に進められて ……7.0%
 - カ. その他 ……約9%
- ア～ウの項目に82.4%の回答がみられる。



特にイの項目が45.6%と高率であり、全般的に家庭科科目の学習意欲が非常に高いことがわかる。前年度と比較すると前年度のア～ウの回答率約70%に対して今年度は82.4%と12.4%高く、これを出身学校の学科別にみると普通科出身者にイ、ウの項目が顕著にみられる。

図4. 受験の動機 (左S59年度, 右S60年度)

(3) 家政科家政専攻志望の決定者

家政専攻者志望の決定者を図5でみると、前年度は全体的に親35%, 自分30%, 教師29%といずれも30%前後であったが、今年度は親43.8%, 自分28%, 教師20.3%である。前年度に比べて親の意見がかなり強い傾向にみられる。これを高等学校の学科別にみると、普通科出身者は自分自身で決定した者が前年度に比べて高い。しかし、商業科・被服科では教師のアドバイスがかなり高率となっている。家政科・その他の学科では自己意志による決定者がみられない。全体的傾向として普通科以外の学科出身者の家政専攻志望の意志決定は、他人の意見が大きく影響しているものとみら

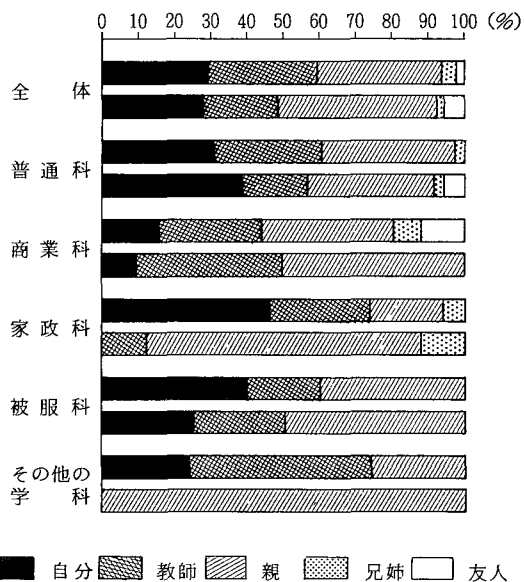


図5. 家政専攻決定者 (上段S59年度, 下段S60年度)

けられる。

2. 被服の既習教材とその利用状況

(1) 小学校既習教材

小学校既習教材は学習後の経過年数が長い為、前年度同様に信ぴょう性に乏しいであろうとは思ったが、前年度との比較により、いささかでも学習の実態を知ることができるであろうと予測して調査した。

袋・枕カバーの学習者は図6でわかるように約80%あるが、これは小学校の被服領域の教材であるから当然である。ところが雑巾の学習者がこれらに次いで今年も高率であるのは、なみ縫い練習のための教材として扱ったものか、或いは「住居と家族」領域で「家庭の仕事に役立つ物の製作」で、なみ縫いを活用して「台ふき作り」をし、雑巾を縫ったと記憶していたものかとも思われる。小物の回答者が10%あるのは、前年度と同様に昭和53年告示小学校学習指導要領の発表による第5学年教材として学習したものである。昨年度の23%に比較して半減しているの

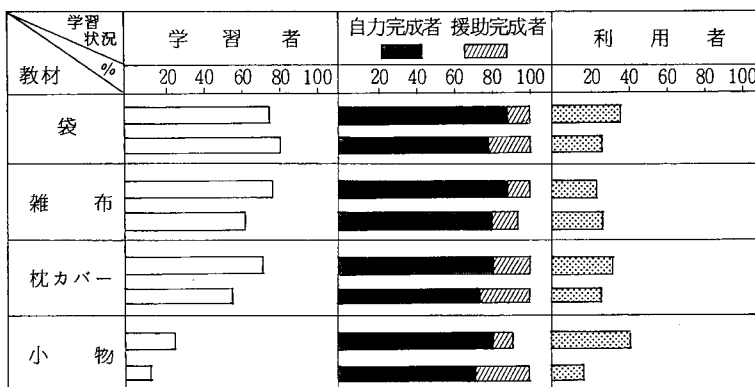


図6. 小学校既習教材 (上段S59年度, 下段S60年度)

は何故であろうか。むしろ移行期第2年度に当るので学習者は多いと推測されるが、理由はわからない。

教材の製作状況については、袋・枕カバーともに自分で完成したと回答している者が約80%であるが、家族の援助を得ている者は、前年度よりやや高率で20~25%である。利用状況は16.7~27.8%で前年度の20~40%に対して更に低い傾向にあることは、何故であろうか。判断しかねることである。

(2) 中学校既習教材

中学校の既習教材は、図7のとおりである。前年度はパジャマ・スカート・作業衣(エプロン)60%で前年度同様にこれら3点は60~90%を占めている。しかし、ワンピースドレスは

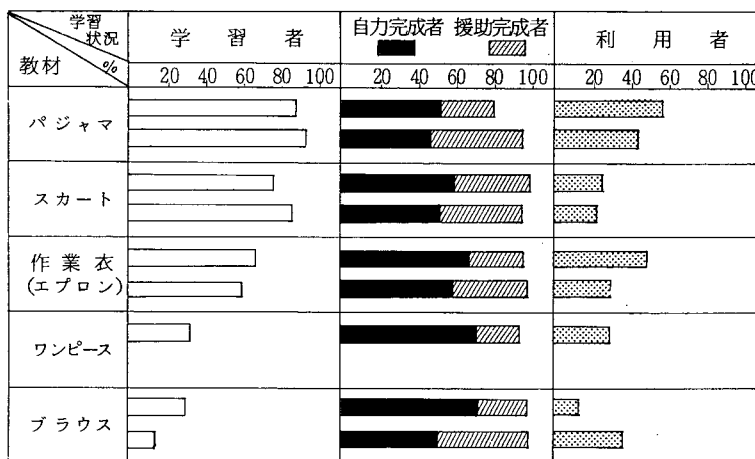


図7. 中学校既習教材 (上段S59年度, 下段S60年度)

皆無であり、ブラウスも10.7%と低率であった。これは前稿で述べたとおり教育課程の改訂に伴う移行措置によるものである。完成状況を見ると40~50%の者が完成のための援助を受けていて、前年度の30~40%に比べて10%増となっている。やはり受験勉強に時間不足と解釈してよいのであろうか。或いは、中学校被服教材は、小学校被服教材と比較し、難教材すぎるという関係者の批判があることを裏づけているようにも思われる。

教材の利用状況はパジャマ43.6%・作業衣(エプロン)31.1%・スカート19.6%である。特にパジャマの前年度利用率60%に対して今年度は約16%も低下していることは、今年度入学生の技術上の問題があるのであろうか推測しかねるところである。

(3) 高等学校既習教材

家政専攻では前年度も普通科・商業科出身者が81%を占めていて、「家庭一般」のみを履習するところが多く、被服教材としては

スカートが74.5%を占めていた。本年度も図8のようにスカートの製作者が71.4%である。その他の教材はいずれも家政科出身者の教材である。しかし前年同様にエプロン教材があり、低率ながら前年度の学習者より倍増していることは見逃せない。前年度はパジャマの学習者もあったことから、中学校教材と混同したものかと推測したが、本年度はパジャマは皆無でエプロンのみ増加している。これは全国高等学校家庭科技術検定⁽²⁾種目の改訂に伴う変更と推測される。



図8. 高等学校既習教材(上段S59年度, 下段S60年度)

完成状況を見るとスカートでは自力完成者が65%で、前年度74.3%に比べて中学校教材の完成状況と同じように低率となっている。更に、普通科出身者のみのスカート自力完成率をみると、40人の学習者中70%(28人)の者が自力で完成していて、普通科出身者の被服製作に対する意欲がうかがえる。

作品の利用状況を見ると、スカート52.5%、エプロン70%、ブラウス・ベスト50%、他の教材は和服教材も含めて約30%前後である。女兒服の利用は皆無であるが、昨年度も僅少であった。これは家政科の教材であるが、着用対象者が生徒の身近かにいないため、単に教材として学習したに過ぎなかったものと思われる。

3. 手縫いとミシン縫いに対する学生の好み

手縫いとミシン縫いに対する学生の好みの実態は表2に示したとおりである。

まず、手縫いについてみると、60年度では好きと思っている者が29%、わからない者25%、きれいな者47%であった。この割合からみると半数の者が手縫いをきれいとしている。59年度は好きと思っている者39%、わからない者47%、きれいな者は僅かに14%であった。両年度間の差を χ^2 検定でみた場合、1%の水準でもって有意差がみられた。手縫いをきれいとする率が昨年度より3倍近くも多くなっているのは、何故であろうか。

次にミシン縫いについてみると、60年度では好きと思っている者が61%、わからない者32%、きれいな者7%であった。この割合を59年度と比べると多少の差はあるが、「好きな者」>「わからない者」>「きれいな者」と同一傾向にあり、両年度間に χ^2 検定による有意の差はみられなかった。

以上の実態から、手縫いとミシン縫いについて比較した場合、手縫いに対する好みは、ミシン縫いに対する好みより、年度による差が著しいため、入学後の手縫い指導には、指導上の配慮がミシン縫い以上に必要であると思われる。

4. 「なみ縫い」技能の習得状況と理解度

(1) なみ縫い技能の習得時期

59年度と60年度における学生が、なみ縫い技能を習得したと思っている時期は表3のとおりである。小学校で習得したと思っている者は59年度53%、60年度47%、中学校では59年度21%、60年度25%、高等学校では59年度19%、60年度20%で、未習得者はそれぞれ6%と9%である。この状況からみると、2か年間の実態から小学校時代に約半数の者が習得したとっており、中学校・高等学校では約40%強の者が習得したと思ひ、残りの者は未習得のまま高等学校を卒業しているようである。

(2) なみ縫い技能の習熟度

なみ縫い技能の習得時期は、前年度同様にかかなりの差があることからその技能の習熟度を調べてみると、小学校第5～6学年で習得できたと思っている26人のうち、ア、自由に縫えるようになったと思っている者4%、イ、かなり自由に縫えるようになったと思っている者89%、ウ、余り縫えないと思っている者8%と答えている。中学校第1学年～3学年で習得したと答えた者14人

表2. 縫いの好ききらい

(上段S59年度94人, 下段S60年度56人)

	好 き		わ かり ない		き ら い		計	
	人	%	人	%	人	%	人	%
手 縫 い	37	39.4	44	46.8	13	13.8	94	100
	16	28.6	14	25.0	26	46.4	56	100
ミシン縫い	67	71.3	24	25.5	3	3.2	94	100
	34	60.7	18	32.1	4	7.1	56	99.9

手 縫 い $\chi^2=19.8$ P>0.01

ミシン縫い $\chi^2=2.3$ n.s

表3. なみ縫い技能習得時期

(上段S59年度94人, 下段S60年度56人)

	人 数	%
小 学 校	50	53.2
	26	46.5
中 学 校	20	21.2
	14	25.0
高 等 学 校	18	19.2
	11	19.6
未 習 得	6	6.4
	5	8.9
計	94	100
	56	100

では、アと答えた者7％，イ，21％，ウ，72％，高等学校で習得したと答えた者11人のうち，ア，27％，イ，36％，ウ，36％である。このことからなみ縫い技能の習得時期は前稿のように低学年の方が習熟度が高いことがわかる。

③ なみ縫い技能の理解度

「なみ縫い」技能がどの程度理解できているか前稿同様に下記①～④の調査をした。

- ① 縫い易い針は長針ですか短針ですか。
- ② 縫い易い両手の間隔はどの位ですか。
- ③ 上手に縫うために左右の手はどのように動かしますか。
- ④ 晒しもめんの「なみ縫い」の縫い目はどの位にしますか。

その結果

①については長針69.6％，短針10.7％，どちらでもよい19.6％であり，長針使用者が70％を占めている。短針の使用者は家政科・被服科の出身者で，短針用指ぬきの使用もしている。

②縫い易い両手の間隔は5cm位と答えた者23.2％，10cm位8.9％，間隔なしで縫いすすむ67.9％であった。間隔なしと答えた者が最も多い。

③上手に縫うため，左右の手の動かし方については，左右平等に動かすと答えた者17.8％，意識していない42.9％，右手のみ動かす23.2％，左手のみ動かす16.1％である。意識していない者が半数近い。

④晒しもめんを「なみ縫い」する場合の縫い目の長さは2mmと答えた者51.8％，3mm26.8％，4mm10.7％，5mm10.7％，6mmは皆無で2mmが半数以上を占めている。縫い目の大きさは素材に関係なく，細かく縫うことがよいと理解しているのではなかろうか。

前回調査のなみ縫い技能の理解度と比較検討すると，

①使用している縫い針の種類は長針が多く，短針の使用者は家政科・被服科の出身者である。一般に初心者には長針を用いるのが^③よいとされ，やや専門的には短針が^④よいということから，家政科・被服科卒業の学生は高等学校時代に短針で^⑤学習したのであろう。

②両手間隔の望ましい寸法は先行研究によれば，10cm位がよいとされているが，回答はさまざまで問題がある。

③両手の動かし方は，大半の者が意識していないようであるが，先行研究によれば^⑥左手を右手より大きく動かすのがよいようで，ここにも問題がある。

④縫い目の長さは，前回の調査では4mm±1mmと理解している者が多かったが，今回は2mmが半数をこえており，両年度間に認識のずれがある。一目の縫い目の大きさについては，有力な先行研究がまだなされていないため，従来から適性といわれている4mm±1mmを採用するならば，本年度の学生の認識に問題があるといえる。

これらの結果から，なみ縫い技能の理解度は決して十分とはいえないことが明らかである。

5. 「なみ縫い」技能の学生評価と教師評価

なみ縫い技能の評価は，学生・教師共に前稿同様に行った。図9は学生の自己評価と教師評価（ピ

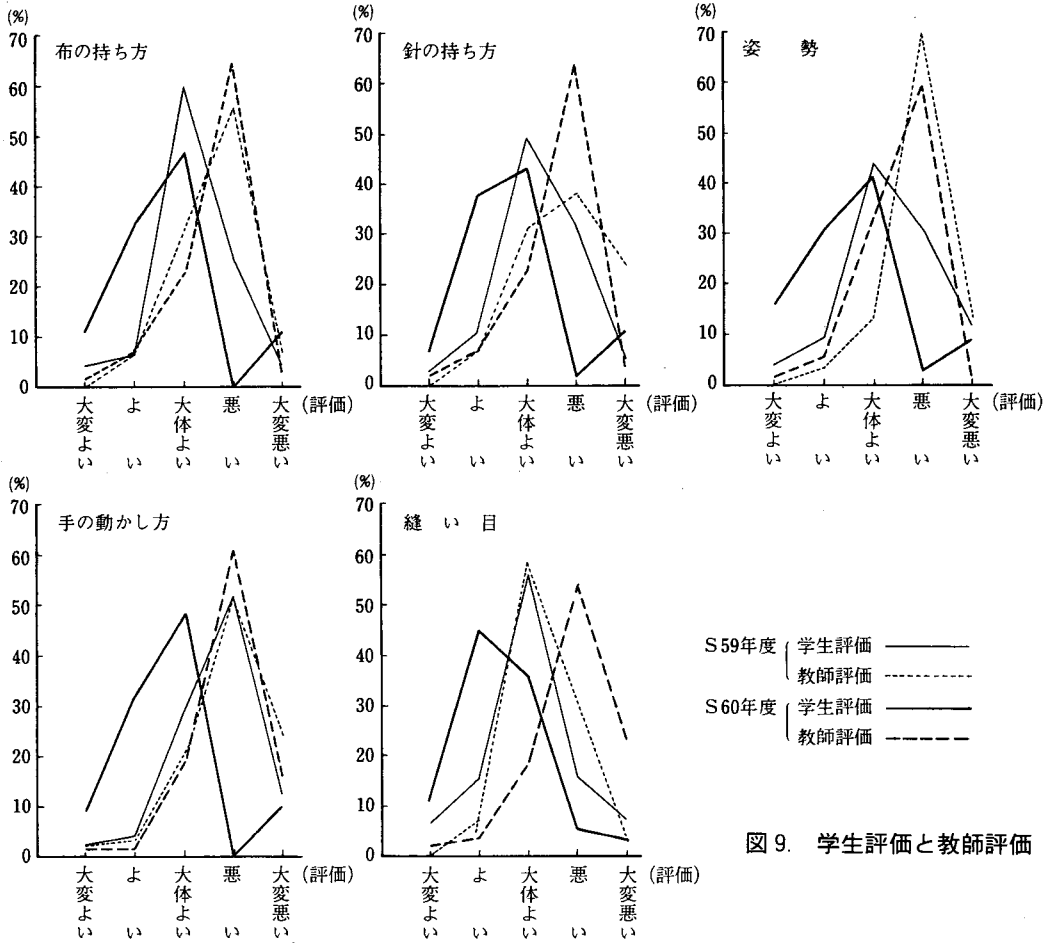


図9. 学生評価と教師評価

デオカメラ撮影テープの録画再生による評価)を比較したものである。

- ・教師の評価はいずれの項目も「悪い」に集中している。
- ・学生評価は縫い目については、「よい」「大体よい」の者が70%である。それ以外の項目では「大体よい」に集中している。

表4. なみ縫いの評価 (平均値, 標準偏差)

(%)

項目	布の持ち方	針の持ち方	姿勢	手の動かし方	縫い目	平均	
平均	昭和59年度	2.4	2.2	2.1	2.0	2.7	11.37
	昭和60年度	2.6	2.4	2.5	2.1	2.1	11.64
標準偏差	昭和59年度	0.72	0.89	0.64	0.77	0.65	3.16
	昭和60年度	0.73	0.75	0.71	0.75	0.84	3.31
有意差の有無						*** P > 0.01	

評価3をピークとし、60年度は評価2をピークとしていることから、両年度に差があることが予想される。そこでt検定により5項目の評価結果を比較したところ、表4でわかるように縫い目には、危

危険率1%の水準で有意の差があることが認められた。さらに両年度の全体平均についてもt検定により比較したが有意の差は認められなかった。

これらのことから59年度入学の学生と60年度入学の学生のなみ縫い技能の習得状況には、縫い目以外に著しい相違はないものと思われる。

IV ま と め

家政科家政専攻者を対象に2年間にわたり、被服構成実習(和裁)指導に必要な基礎調査をした結果、ある程度の指針が得られたので要約する。

1. 本学家政専攻入学者は昭和59年度・60年度共に普通科出身者が大半であり、「家庭一般」の学習のみで終わっている。しかし、家庭科学習の意欲は今年度も前年度同様に高く、この学生達の今後の指導には大きな希望をもつことができる。
2. 小・中・高等学校における被服製作の既習教材をみると、今年度も小学校では自分で完成したと知っている者が大部分であるが、中学校では約半数に近い者が援助を受けて完成しており、高等学校でも中学校より低率であるが、かなりの援助を受けている。これは受験勉強による時間不足と考えてよいであろうが、中学校教材の援助率が高いことについては、小学校・中学校間の被服製作教材の難易差が問題であるようにも思われる。
3. 手縫い、ミシン縫いの学習は、既習教材の完成状況からみても全般的によく学習しているとはいえない。
4. 手縫い、ミシン縫いに対する学生の好みを比較すると、手縫いを好まぬ者が多い。しかし、手縫いを代表するなみ縫いの技能習得状況は、被験者のほとんどが高等学校卒業までに習得していると思っている。そのためか、なみ縫いの自己評価では、「大体よい」と思っている者が多かった。
5. 本論の主題である「なみ縫い指導にかかわる基礎調査」に直接関連が深いなみ縫いの理解度と、技能の教師評価についてみると、前者にはかなりの問題点があることは2の(3)において述べたとおりである。後者については、教師が求める評価水準に比較してかなり低いことが明らかになった。

以上、2か年にわたる家政専攻生の実態調査の結果から、入学当時の学生には、家庭科目を専門的に学習し、家庭生活に役立てたいという意欲が高いことが明らかになった。従って、学生のこの期待に対し、ある程度の成功感を与えることが重要であろう。そのためには、被服構成実習が果す役割は大きい。ところが、入学当時の学生のこの方面に関する水準は、「なみ縫い」に対する理解度、習熟度でもわかるように、正しい知識や技能が乏しいまま、ある程度はできるという誤った自己評価をしており、これは見逃せない問題である。

幸いに、本学家政科家政専攻のカリキュラムでは、第1学年で被服構成実習1(和裁)は必修科目であり、第2学年では選択科目であるが、選択率は例年前期75%程度で、比較的多くの学生が選択している。これらの実態から被服構成実習1の基礎技能とされている「なみ縫い」を正しく理解させ、習熟させるための指導のあり方を早急に検討する必要がある。

最後に、この調査研究をおこなうにあたり、ご指導をいただきました岡山大学西村綏子教授に厚く感謝いたします。

引用文献

- (1) 拙稿・ 被服の縫製指導に関する研究(1)－なみ縫い指導にかかわる基礎調査－中国短期大学紀要第16号
(1985) P 1～8 <当紀要を(1)とする>
- (2) 財団法人全国高等学校家庭科教育振興会, 全国高等学校家庭科技術検定解説書（昭和58年度, 第24回）P 8
- (3) 西村綏子, 原田幸子, 宇賀みどり 岡山県の小学校における被服製作指導（第6報）中学校入学直後における
女生徒の「並縫い」の実態 岡山大学教育学部研究集録第62号（1983）P 34
- (4) 疋田洋子, 北村君, 稲田しげ, 花岡利昌 運針作業の動作分析（第2報）家政学雑誌 V01, 17, N04, (1966)
P 48
- (5) 阪本弘子, 佐野侑子, 山田令子 運針に関する研究－運針動作の形態－家政学雑誌 V01, 32, N02 (1981)
P 38
運針に関する研究－運針動作の分析－家政学雑誌 V01, 33, N010 (1982)
P 31
- (6) 神谷い代子, 古田幸子 縫製の筋電図学的研究第1報－運針の運動方式について－愛知淑徳短大紀要2巻
1号（1963）P 8